

# 古英語散文作品の成立背景と語順に対する影響

—代名詞目的語と動詞の語順分析より—

山 村 誠 治

## 要 旨

代名詞と動詞の語順に関しては、これまでに多くの議論があり、古英語では目的語が動詞に先行するOV語順と動詞の後に現れるVO語順がヴァリエーションとして併存していたこと、そして代名詞目的語は他の要素からなる目的語の場合と比較して、かなりの頻度でOV語順が使用されていたことが明らかにされてきた。しかしながら、作品ごとに語順の使用状況は異なるため、たとえ同時代の成立で、なおかつ類似したジャンルの作品間であっても、OV語順とVO語順の使用状況は様ではない。そこには作品のジャンルや成立背景といった言語外の要因が何らかの形で関連していると考えられる。

本稿では、古英語散文作品における代名詞目的語と動詞の語順の使用状況についての調査結果にもとづき、作品の成立背景とそこで使用される語順との関連性についての一つの試論を提示した。今回、ビードの『英国国民教会史』(*Bede*)と『アングロ・サクソン年代記』(*ChronA*)を取り上げた。この二つの散文作品は、ともにアルフレッド王の統治時代に成立したものの、その成立背景やスタイルが異なっており、比較の結果が顕著に表れると期待したからである。調査の対象としたのは、動詞と対格代名詞目的語および、与格代名詞目的語の語順である。調査の結果、*Bede*の主節で一人称代名詞が用いられる環境において、OV、VO語順使用の揺れが顕著であることが判明した。あらゆる種類の目的語を含めた総合的なOV、VO語順の統計調査では、*Bede*において、歴史的により古いOV語順が用いられる傾向があるにもかかわらず、一人称の代名詞に限って言えば、逆転の現象が生じたわけである。*Bede*のように民衆の教育・指導を目的として書かれた散文作品では、作者は、民衆に古くからなじみのあるOV語順を意識的に用いたのであろう。しかし、時として感情の高揚から様々な語順が用いられ、発話、陳述の主体である一人称において語順の揺れが生じたと考えられる。

キーワード：古英語散文、語順、代名詞目的語、文体論、統語論

## 1. はじめに

古英語（以下OE）期における散文作品には、Mitchellが指摘しているように主語と動詞の間で否定辞の*ne* (*not*) や代名詞の直接目的語、間接目的語が頻繁に現れる<sup>1)</sup>。また、現代英語における平叙文の語順SV...は古英語期の段階では支配的ではなかった<sup>2)</sup>。古英語期は英語史上、インドヨーロッパ基語（Proto-Indo-European）、あるいはゲルマン基語（Proto-Germanic / Primitive Germanic）で通常用いられていたとされる主語－目的語－動詞（SOV）語順が、現代英語で通常用いられる主語－動詞－目的語（SVO）語順に変化していく上での過渡期に当たり、目的語が動詞に先行するOV語順と、動詞のあとに続くVO語順の選択に揺れが認められる。とりわけ、代名詞目的語は、他の名詞、名詞句あるいは名詞節によって構成される目

的語と比べ、かなりの率でOV語順を保持していることがこれまで指摘されてきた。

代名詞はOV、VO語順を形成する上で通常の名詞の目的語とは異なった傾向を示すことがこれまで文献学的な視点に基づく研究だけでなく、Van Kemenade (1987)、Pintzuk (1992)などの言語理論に基づく研究の分野でも注目されている。しかしながら、その多くが代名詞をひとまとめに扱う段階にとどまり、代名詞の種類や人称と語順との関連にまで視点を広げた考察は、著者の知る限りでは、あまり多くはない。

このような研究の現状を踏まえ、本稿ではまず始めに、古英語散文作品に見られる動詞と代名詞目的語によって形成される語順を取り上げ、OV語順とVO語順の使用の揺れの程度を調査し、揺れの原因が主に主節の語順にある点を指摘する。また、たとえ同じ時期に成立したとされる作品であっても作品が異なれば、語順の揺れの傾向が著しく異なる現象を、作品のジャンルや執筆目的といった作品の成立背景との関連より論じる。さらに人称代名詞の語順調査を通じて、ある特定の人称に語順のヴァリエーションを生み出す要因があるのかどうかを考察する。最後に、個々の作品の成立背景、ジャンル、あるいは、どのような読み手・聞き手を対象としているのかといった統語的要因以外の条件が語順選択に反映している可能性について論じたい。

## 2. 調査対象と方法

### 2.1 テキスト

本稿では9世紀後半のアルフレッド期(871-99)に成立したとされる散文作品より、イギリス、アングロ・サクソン時代の聖職者ビード(Bede, c.672-735)によりラテン語で記された『英国国民教会史』(*Historica Ecclesiastica Gentis Anglorum*, 731)のOE訳*Bede's Old English Version of Ecclesiastical History of the English People*(以下、*Bede*と表記)<sup>3)</sup>と『アングロ・サクソン年代記』(*Anglo-Saxon Chronicle*)の一つである*The Parker Manuscript of the Anglo-Saxon Chronicle*(以下*ChronA*と表記)<sup>4)</sup>の二つの散文作品を語順分析の対象として取り上げる。前者はラテン語からの翻訳で、後者は古英語の地の文という相違はあるものの、歴史的な事件や出来事を記述しているという点では共通しており、比較的類似したジャンルに属すると考えられることから、本稿で取り上げることにした。

本稿における調査の範囲は、*Bede*に関しては、その校訂本としてよく知られているMiller(1890-98)を用い、ビード自らが執筆の動機を述べている序文と本編第一巻、第二巻までの記述を調査範囲とした。次に、*ChronA*は、*Bede*との比較という観点から*Bede*の成立とほぼ同時期で、ラテン語の翻訳の影響が少なく、単独の写字生の手によるとされる西暦755年から897年までの記述を調査の対象とした。先にも述べたように、*ChronA*は歴史的事実を記述しているという点で*Bede*と類似したジャンルに属していると考えられるが、作品成立の背景や

その執筆目的は *Bede* とは異なっており、その相違がどの程度語順使用に影響を及ぼしているのかを論じたい。

## 2.2 動詞十代名詞目的語構造について

本稿では、動詞とその代名詞目的語によって形成される語順を調査したが、節における語順が重要な位置を占めるという観点より、調査の対象を以下のように限定した。

まず動詞は、定形動詞あるいは、不定形動詞、現在分詞、過去分詞とし、代名詞との統語上、意味上のつながりを重視するという観点より法助動詞＋不定詞、*be* 動詞＋現在分詞、*be* 動詞＋過去分詞、*habban* (*have*)＋過去分詞の構造はいずれも不定詞、あるいは分詞と代名詞目的語が形成する語順を調査の対象とした。

代名詞目的語の対象は、動詞に直接支配されている対格、および与格の人称代名詞と指示代名詞である。したがって、属格の目的語や、(1)に見られるように、動詞ではなく前置詞の目的語であると判断し得る代名詞は調査の対象外とした<sup>5)</sup>。

- (1) 〕Cantware him to cirdon  
(and Kentishmen him to submitted)

‘and the Kentishmen submitted to him’ (ChronA 64.27 (853))

## 2.3 節の種類とその定義

これまでの多くの研究において、古英語の語順は、主に主節、従節といった節の違いとの関連で論じられてきた。また、主節と従属節の語順傾向に違いがあることは、古くから指摘されている。さらに、*and*あるいは、*ac* (*but*)によって導かれる主節の語順が通常の主節の語順とは、異なる傾向を示す点も、すでに指摘されている (Michell 1964)。本稿の調査でも、節の分類方法に関しては先行研究に従うが、とりわけ、節が明確に定義されている Bean (1983) の分類法を採用した。

The clause types include main clauses, conjunct clauses, relative clauses and subordinate clauses. Main clauses (MCs) are independent clauses which contain an overt subject, nominal or pronominal; conjunct clauses (CCs) are independent clauses not containing overt subjects; relative clauses (RCs) are noun-modifying dependent clauses; and subordinate clauses (SC s) are all non-relative dependent clauses.

(Bean 1983: 58)

Bean (1983) は Main clause (以下, MC と表記), Subordinate clause (以下, SC と表記), Relative clause (以下, RC と表記) に加え, 明確な主語が存在しない節を Conjunct Clause (以下, CC と表記) として独立させている点に特徴がある。CC は従来の分類方法では, MC に分類されていた節だが, 本稿における調査においても MC とは異なった語順の傾向を示していた。以下, (2)~(5) にそれぞれの節の例を一つずつ挙げておく。

(2) MC ʒ hi *hine*(acc) gebundenne to him læddon.

(and they him bound to him lead)

‘and they(the governor’s attendants) brought him(Alban) bound to him(the governor)’

(*Bede*34.28)

(3) CC ʒ *hine*(acc) oferhygdigne tealdon

(and him haughty considered)

‘and considered him(Augustine) haughty’ (*Bede*102.7)

(4) SC þæt hi *him*(dat) wæpno worhton ...

(that they them weapons made )

‘that they made weapons for themselves’ (*Bede*44.34-46.1)

(5) RC þe *him*(dat) Paulinus(nom) bodade se halga biscop

(which them Paulinus preached the holy bishop)

‘which the holy bishop Paulinus preached to them(Eadwine and the people of Northumbria)’

(*Bede*118.30-31)

(下線は動詞, 斜字体は代名詞目的語を表す。以下同様)

本稿では, Bean (1983) の分類法に加え, *and/ac* に導かれる主節と, そうでない主節との語順傾向の相違を考慮に入れ, MC をさらに, *and/ac* を持たない Plain MC と, *and/ac* に導かれる MC とに区別している。また, MC, CC では, 語順に影響を与えるとされる副詞 *þa*

(then) や否定辞 *ne* などの副詞類の語順についても論じた (Andrew 1944)。

### 3. 節中における代名詞目的語と動詞の語順

#### 3.1 代名詞目的語の語順形成における特性

この節では、*Bede*、*ChronA*それぞれの調査範囲における節の種類と動詞+代名詞目的語構造の語順の分布状況を調査した。表1は、その調査結果をまとめたものである。

統計の一部の項目に関しては、該当する節が無い、あるいは数が少ないといった問題点も残されるが、節の種類と語順の間に見られる傾向を把握するには有用であろう。なお、表中、百分率の後に記載されている括弧書きの数字は節の数を示すものである。またNF (Non-Finite) は、他の四種類のどの節にも当てはまらず、節から独立した不定形とその代名詞目的語から成る統語構造で、比較の参考として併記しておいた。統計結果から読み取られるように、*Bede*、*ChronA*ともにSC、RCおよびNFでは代名詞目的語が動詞に先行するOV語順が支配的である。一方、MCにおける動詞+代名詞目的語構造の語順に関しては、*Bede*が61.5%、*ChronA*が70.7%とともにOV語順が支配的とは言い難い結果となった。CCに関しては、とりわけ*Bede*において、MCの場合ほどではないが、OV、VO語順の選択に若干の揺れを確認できた。以上の語順の使用状況から、RC、SCにおいては歴史的により古い語順構造が保たれていることが窺える。別の言い方をすれば、OV、VO語順の使用の揺れは、主にMC、CCにおける語順選択の揺れに帰因すると言えるだろう。

では、*Bede*と*ChronA*における語順選択の揺れの状況は、どのように違っているのだろうか。二つの散文作品の統計結果を比較すると、*ChronA*においてより多くのOV語順を保持する傾向が見られ、特に、CCにおいて両作品の語順使用頻度に顕著な差が見られた。このことは、統計上では*ChronA*が*Bede*よりも歴史的に古い語順傾向を持つことを意味している。しかし、ここに一つの疑問が生じる。一般的に、文学的により洗練された作品においては、執筆の時代に用いられていたものよりも古い言語相を示すと言われている。*Bede*はラテン語の原典からの翻訳作品であり、実際にそこで使用されている英語はより複雑で、文体的にも趣向を凝らしたものだという印象を受ける。この点から、歴史上の事件、出来事を後世に伝えることを

表1 *Bede*、*ChronA*における節の種類とOV、VO語順

	<i>Bede</i>			<i>ChronA</i>		
	OV	VO	Total	OV	VO	Total
MC	61.5% (64)	38.5% (40)	104	70.7% (29)	29.3% (12)	41
CC	73.1% (49)	26.9% (18)	67	90% (18)	10% (2)	20
SC	91.1% (51)	8.9% (5)	56	90% (9)	10% (1)	10
RC	94.1% (16)	5.9% (1)	17	(3)	—	3
NF	96.6% (85)	3.4% (3)	88	(13)	—	13

表2 *Bede*, *ChronA*における節と動詞十目的語構造のOV/VO語順

Clause	<i>Bede</i>			<i>ChronA</i>		
	OV	OV	Total	OV	VO	Total
MC	63.3% (31)	36.7% (18)	49	41.2% (28)	58.8% (40)	68
CC	75.0% (27)	25.0% (9)	36	64.1% (25)	35.9% (14)	39
SC	88.2% (30)	11.8% (4)	34	87.0% (20)	13.0% (3)	23
RC	95.2% (20)	4.8% (1)	21	100% (8)	— (—)	8

(Yamamura 2001: 41, 55)

主な目的とする*ChronA*の文体と比較して、*Bede*の文体はより洗練されたものと考えられるのではない。実際、筆者による*Bede*と*ChronA*の対格目的語全体のOV、VO語順を対象とした調査では、MCで*Bede*のほうがより古い、言い換えるならば、より保守的なOV、VO語順の分布を示していた(表2)。

表2の統計結果は本稿の調査対象とは異なり、目的語を対格に限定し、与格を含まないために、単純に比較するには問題もある。しかし、より洗練された文体を含む*Bede*に、高い頻度でOV語順が用いられていることを判断する材料としては有用であろう。表2の調査は、与格目的語を含まない点に加えて、代名詞だけでなく、あらゆる統語構造から成る目的語を含んでいる点が表1と異なっている。しかしながら、それ以外の点では同一の調査方法が取られている。つまり、表2との比較より、代名詞目的語が語順形成において、他の目的語とは異なる性質を持っていると判断できるのではないだろうか。表1の結果より、MCとCCにおける*Bede*の代名詞の用法には、古い語順よりも、新しいVO語順を用いようとする何らかの要因、あるいは*ChronA*の代名詞の用法に古い語順を残しておこうとする何らかの要因があると思われる。

これまで、主節の語順は、情報構造に基づく代名詞の話題化(Topicalization)や統語構造の重さ(Heaviness)、言語類型論(Linguistic typology)、あるいは生成文法の分野で動詞第2位言語(Verb second language)等の様々な理論により説明が試みられてきた<sup>6)</sup>。これらの先行研究では、それぞれOE期の散文の語順が的確に説明されているが、実際は、こういった研究成果で得られた諸要因が多角的に関連し合っただけでOEの語順を形成しているとするのが現実的な捉え方である。しかしながら、表1、あるいは表2に見られるように、たとえ同時代に成立したとされる作品間であっても、MCやCCにおいて、OV、VO語順選択の揺れに程度の差が見られる点については、いずれの理論に基づいても説明は困難である。この差を生み出す原因を説明するためには、それぞれの作品の著者、ジャンル、成立背景といった言語外の要因を考慮しなければならない。

### 3.2 *Bede*, *ChronA*のMCとCCにおける動詞十代名詞目的語構造

前節では、より古い語順傾向を保持すると推測できる*Bede*において、代名詞目的語と動詞の語順を対象とした場合、語順選択の揺れが大きくなるという疑問が生じた。この疑問を解明

するために、本節ではOV, VO語順の使用における揺れが顕著に見られるMC, CCに的を絞る、*Bede*と*ChronA*ではどのような条件で揺れがより頻繁に生じるのかを論じることとする。

OE期の散文において、節が*and* (and), *ac* (but), あるいは, *ne* (not), *þa* (then) といったある特定の語句によって導かれる場合と、そうでない場合では、使われる語順の傾向が異なることは、従来の研究により明らかにされている<sup>7)</sup>。本稿でも、*and* /*ac*, *ne*, *þa*で始まる節とそうでない節を分類してMCを調査したところ、表3のような結果が得られた。

まず、*Bede*における調査結果に関しては、従来の研究結果を裏付けるものとなった。Plain MC以外の項目で語順の傾向がほぼ定着している一方で、Plain MCではOV語順が53例中35例で約66.0%となり、MCの中で最も語順の揺れを確認することができた。これは、Plain MCの語順が*þa*や*ne*といった語に影響を受けないことに一因があるように思われる。一方、*ChronA*では、*and* / *ac*節がMCの大部分を占めている。これは、出来事を起こった順に次から次へと*and*でつなげていくという、いわば*ChronA*の文体の影響によるものである。*and* / *ac*節ではOV語順が29例中23例で全体の8割近くを占めている。以上の結果より*Bede*のMCにおける動詞+代名詞構造でOV, VO語順の揺れを最も大きくする要因は、MCの中でも特にPlain MCにあると言えるだろう。

表4は、表3と同様の分類方法で二作品のCCの語順について調査したものである。特に*ChronA*ではデータの総数が少なく、十分な結果を得られるには至らなかったが、CCでは、どのような状況においても比較的語順選択の傾向は定まっているようである。表3, 4の結果を総合すると、動詞+代名詞目的語構造でOV, VO語順の揺れを左右する要因は、CCではなく、MCにあると言えるだろう。

表3 *Bede*, *ChronA*のMCにおける動詞+代名詞目的語構造節のVO/OV語順

MC	<i>Bede</i>			<i>ChornA</i>		
	OV	VO	Total	OV	VO	Total
Plain	66.0% (35)	34.0% (18)	53	— (4)	—	4
<i>and/ac</i>	83.9% (26)	16.1% (5)	31	79.3% (23)	20.7% (6)	29
<i>ne</i>	25.0% (1)	75.0% (3)	4	—	—	—
<i>þa</i>	—	— (12)	12	25.0% (2)	75.0% (6)	8

表4 *Bede*, *ChronA*のCCにおける動詞+代名詞目的語構造節のVO/OV語順<sup>8)</sup>

CC	<i>Bede</i>			<i>ChornA</i>		
	OV	VO	Total	OV	VO	Total
Plain	18.7% (3)	81.3% (13)	16	—	—	—
<i>and/ac</i>	90.2% (46)	9.8% (5)	51	90.0% (18)	10.0% (2)	20
<i>ne</i>	— (1)	—	1	—	—	—

## 4. 代名詞の人称と語順選択の関連性

### 4.1 *Bede*の文体と語順の関わり

MC, CCにおける動詞と目的語が形成する語順を、目的語の構造にとらわれずに調査した結果、*Bede*ではOV語順への依存が*ChronA*の場合よりも高く、全体的に古い語順を保持しているという結論に至った (Yamamura 2001)。しかしながら、目的語を代名詞に限定した今回の調査では、*Bede*ではなく*ChronA*により高い頻度でOV語順を保持するという矛盾する結果が得られた。従来より、代名詞目的語が動詞に先行する傾向にあることは主に統語論の立場から明らかにされてきた。しかしながら、今回の代名詞目的語の事例のように、なぜ取り上げる作品ごとに異なった語順の傾向が見られるのかという疑問には、統語論の立場からだけでは答えることは困難である。こういった疑問に答えるためには、作品個々のジャンルや成立背景なども考慮に入れるべきである。この章では、散文作品が書かれた目的やその対象が語順の選択と何らかの関連を持つという前提で、代名詞目的語の人称と語順選択の関連性についてさらに詳細な調査と考察を続ける。そして最終的に、なぜ*Bede*の主節に語順の揺れが生じるのかという疑問に対する一つの試論を提示したい。

まず最初に、*Bede*の文体について論じていくことにする。Raffel & Olsen (1998) によると、アルフレッド王のラテン語文献翻訳事業は、9世紀当時の低下した民衆の教養水準を改善するという「教育」と「指導」を主要な目的としていた。

Anglo-Saxon prose flourished in the late ninth century under King Alfred (reigned 871-899). When Alfred began his educational program to make every free-born boy literate in English, he was less concerned to reproduce Latin texts than to produce books that would give his subjects a practical and liberal education.

(Raffel and Olsen 1998: 162)

このことが事実だったとすれば、ラテン語の文献を教育水準の低下した民衆が理解できないような難解な英語に翻訳していたのでは、民衆の「教育」と「指導」という目的を達成することはできないだろう。真鍋 (1983) は、アルフレッド王のラテン語翻訳事業では、翻訳に際してラテン語をわかりやすい表現に意識しようとする努力があったと指摘している。教育水準の低い民衆を引きつけるためには、少なくとも難解な英語は避けられたに違いない。

言語的には、Alfredの*Bede*は原典のラテン語の忠実な逐語訳であり、英語らしい表現を犠牲にしているところも希でない。例えば、筆者の調査では、*Bede*にはいわゆる分詞構



文が目立って多いが、それには原典のラテン語の遊離奪格構造の模倣の結果によるものも少なくないのである。〔中略〕しかし、Alfredが原典のラテン語を、英語らしい分かり易い表現に意識しようと工夫したことは、Alfredの翻訳作品全体に一貫して認められる。〔中略〕したがって、逐語訳をすることはあっても、それは聖書のからの引用句や、忠実な訳でも理解し易いラテン語の場合が多かった。

(真鍋：1983: 20-24)

#### 4.2 代名詞目的語の人称と語順

この節では、*Bede*の代名詞目的語と動詞の語順の中でも揺れが顕著に見られるMCとCCに的を絞り、そこで用いられる人称代名詞目的語の人称とOV、VO語順の使用頻度についての調査を行った。まず始めに、MCについては、本稿での*Bede*の調査範囲には、一人称、二人称、三人称のそれぞれ単数あるいは複数の人称代名詞を動詞の目的語にもつ節がそれぞれ17例、13例、60例確認できた。次にCCについては、それぞれ4例、3例、71例で、三人称の例が圧倒的多数を占めている。表5は*Bede*のMCとCCにおける代名詞目的語の人称と動詞が形成する語順の調査結果である。この中で語順選択の揺れの程度が大きかったのは一人称と三人称の代名詞目的語で、前者では17例中10例がOV語順で、その頻度は58.9%であった。後者のOV語順は60例中35例で、58.3%であった。三つの人称の中でOV、VO語順の揺れが比較的小さかったのは二人称代名詞で、13例中11例がOV語順となり、その頻度は84.6%であった。

CCにおける語順の揺れは、实例の件数自体が少なく十分な統計結果を得るには至らなかった。不十分な調査結果ではあるが、表5が示すように、一人称と二人称の代名詞と動詞の語順はOV語順のみで、三人称代名詞を含む目的語の場合は60.6%がOV語順となり、MCと類似した揺れの傾向が見られた。

調査から*Bede*のMCでは、人称代名詞の中でもとりわけ一人称の代名詞目的語と動詞の語順に大きな揺れがあることが明らかになったが、*Bede*の成立背景と語順との関連において次のような推測が可能ではなかろうか。すなわち、*Bede*は教育水準が低い民衆に対する教育や指導を目的したために、翻訳に際しても、古くから慣れ親しまれたOV語順を意識的に用いるよう配慮がなされた。しかしながら、時に翻訳者の感情の高まりから、より新しいVO語順の使用へとつながり、結果として一人称の代名詞目的語と動詞の語順に大きな揺れが生じるに至

表5 *Bede*のMC、CCにおける人称代名詞目的語のOV語順とVO語順

person	MC			CC		
	OV	VO	Total	OV	VO	Total
1st	58.9% (10)	41.1% (7)	17	— (4)	—	4
2nd	84.6% (11)	15.4% (2)	13	— (3)	—	3
3rd	58.3% (35)	41.7% (25)	60	60.6% (43)	39.4% (28)	71

ったのではないだろうか。実際、一人称代名詞によるVO語順が作品中で使用される方法について、ある興味深い特徴を確認することができた。(6) から (10) は一人称代名詞目的語を含むMCの例で、初めの二例は*Bede*の序文から、後の三例は本編に相当する第一巻、第二巻からのものである。

- (6) Swiðost he *me sæde* of ðeodores gemynde,  
 (chiefly he me said about Theodorus memory)  
 se wæs biscop on Cantware byrig, ʒ Adrianus abbud,  
 (who was bishop in Canterbury and Adrianus abbot)  
 forðon he swyðost wæs mid him gelæred.  
 (because he chiefly was with them learn)

‘He told me chiefly about Theodorus, of blessed memory, who was bishop in Canterbury, and of the abbot Adrianus, under whom he had chiefly studied’

(*Bede* 2.18-20)

- (7) Swiðe fela hi *me sædon* fram gehwylcum biscopum,  
 (very much they me said about some bishops)  
 ʒ hwylcum cyninga tidum Eastseaxe ʒ Westseaxe ʒ Eastengle  
 (and some king’s periods East Saxons and West Saxons and East Angles)  
 ʒ Norðanhumbre þære gife onfengon Cristes geleafan.  
 (and Northumbrians the gift received Christ’s faith’s)

‘They told me very much as to the bishops and the dates of the kings, under whom the East Saxons, West Saxons, East Angles and Northumbrians received the grace of Christ’s faith’ (*Bede* 4.7-10)

- (8) ʒ eac ymbe With ðæt igland swyðost he *me sende* on gewritum.  
 (and also about Wight the island chiefly he me sent on letters)

‘and also about the Isle of Wight, he chiefly sent by letter’ (*Bede* 4.13-14)

- (9) *Us drifað* þa ellreordan(nom) to sæ;  
 (us drives the barbarians to sea)

‘The barbarians drives us to the sea’ (Bede 48.6-7)

- (10) wiðs cufeð *us* seo sæ(nom) to þam ællreordum:  
(thrusts back us the sea to the barbarians)

‘the sea thrusts us back to the barbarians’ (Bede 48.7)

*Bede*の序文では、一人称代名詞を動詞の目的語とするMCは(6)、(7)を含めて四例しか確認できなかったが、そのいずれもが共通してOV語順で書かれていることは注目に値するのではないだろうか。それに対し、本編の第一巻、第二巻では多くの場合、(8)、(9)、(10)の例に見られるようにOV、VO語順の選択に揺れが見られた。ここで一人称の代名詞目的語は、原作者ビード自身を指すか、あるいは伝承の中に登場する人物の語りの部分で、その人物自身を指すかのどちらかで、翻訳者自身を指す例は皆無と言ってよい。しかしながら、翻訳に際して、「原典のラテン語を、英語らしい分かりやすい表現に意識しようと工夫」した時、少なからず当時の英語の語順が、訳し出された英文にも反映されていると考えられる。たとえば、一人称の代名詞が翻訳者自身を指さずとも、翻訳者が自分自身の体験に重ね合わせて、すでに広く民衆の間に浸透していたOV語順を好んで用いたのではないだろうか。このことは推測の域を決して出ることはない。しかしながら、一人称は、ほかの二人称、三人称と異なり、話し手、書き手自身を指している。そのため、一人称代名詞を含む文の内容には、話し手、書き手の意図や感情が含まれることも多いだろう。*Bede*の翻訳者が序章では古いOV語順を利用して教育水準の低い民衆の理解に配慮しつつも、本編では内容の展開に伴う感情の高まりから、時に新しいVO語順を使用するという、書き手の感情の起伏のようなものが現れているのではないだろうか。

MCにおいて一人称代名詞がVO語順で用いられる例は、今回の調査範囲から合計7例を確認することができた。先に挙げた(10)を除く残りの6例は、次の(11)から(16)に挙げる通りである。ここでは、すべてに共通した特徴として、動詞が節の初めの位置で用いられている。

- (11) Saga *me* hwylces hiredes ] hwylces cynnes þu si.  
(tell me of what family and of what race thou art)

‘Tell me of what family and of what race thou art’ (Bede 36.14)

- (12) Gesaga *me* þinne naman, hwæt ðu haten sie.

(tell me thy name, which thou called art)

‘Tell me thy name by which thou art called’ (Bede 36.18-19)

- (13) þonne wite þu *me* cristene beon:  
(then know thou me Christian be)

‘then know that I am a Christian’ (Bede 36.17)

- (14) Forhwom ne recst þu *us* þone hwitan half, þone þu sealdest Saban ussum fæder...?

(why not present thou us the white bread, which thou gave Saba our father...)

‘Why do you not present to us the white bread, which you gave to our father Saba...?’ (Bede 112.10-12)

- (15) Ne tala þu *me*, þæt ic ne cunne ...  
(not imagine thou me, that I not know...)

‘Do not imagine that I am ignorant of ...’ (Bede 128.22-23)

- (16) Ac gesaga *me* hwylce mede þu wille syllan ...  
(but tell me what reward thou will give...)

‘But tell me what reward you will give ...’ (Bede 128.25-26)

(10), (11), (12) のように動詞が節の最初の位置で用いられている場合と, (13), (14), (15), (16) のように副詞や接続詞のすぐ後の位置で用いられている場合が見られたが, いずれの場合も動詞が節の前方の位置で用いられた結果として, VO 語順が生じている。動詞の前置が書き手の感情の起伏の結果によるものかどうかの判断は困難であるが, VO 語順の共通した特徴となっている点は注目すべきである。

これまで調査を進めてきた *Bede* はラテン語からの翻訳作品であるが, 結果として得られた VO, OV 語順の揺れは, どの程度ラテン語の影響を受けているのだろうか。ここからは, ラテン語の OE 語順に対する影響の度合いを検証するために, (10) から (16) の節とラテン語

の相当箇所との比較を行い、原典と翻訳との間に見られる類似点、あるいは相違点について考察を進めていくことにする<sup>9)</sup>。

まず始めに、(10)の節に相当するラテン語原典の表現は(17)であるが、(10)に見られる代名詞*us* (*us*)に相当する語は原典には存在せず、OEに翻訳される際に付け加えられたものであることがわかる。

(17) repellit mare ad barbaros

次に(11)は、ラテン語原典では(18)のように表現されている。ラテン語では、‘Of what family and of what race art thou?’に相当する*Cuius familiae vel generis es?*だけが記載され、OE訳で用いられている*Saga me* (*say to me*)に相当するラテン語表現は存在しない。*inquit*は英語の*say*に相当する動詞であるが、ここでは命令形ではなく三人称単数形であり、OEの*Saga me*に相当するものではない。

(18) *Cuius, inquit, familiae vel generis es?*

(12)の節で用いられている命令形*Gesaga me* (*say to me*)は、ラテン語相当箇所(19)の*quaero* (*I ask*)とは別の表現が用いられている。また、(12)のそれ以外の部分もラテン語原典とは異なる内容に書き換えられている。

(19) *Nemen tuum quaero, quod sine mora mihi insinua*

(20)は、OE訳の(13)に相当する箇所である。ラテン語の動詞*cognosce* (*know*)の目的語*me* (*me*)と不定詞*esse* (*be*)については、OE訳でも同様に不定詞句が用いられているが、語順がラテン語とは異なっている。

(20) *Christianum iam me esse... cognosce*

次の(21)におけるOV語順*nobis porrigis* (*offer to us*)は、OE訳では(14)に見られるようにVO語順*recst...us*となっている。

(21) *Quare non et nobis porrigis panem nitidum, quem et patri nostro Saba*

(22)のラテン語とOE訳(15)は、動詞と代名詞目的語の語順が異なるだけでなく、文章構

造自体にも変更が加えられており、不定詞 *nescire* を含む不定詞句に対して、OE訳では *paet* 節を用いて翻訳されている。

(22) Ne *me aestimes tuae moestitiae et insomniorum...nescire*

OE訳 (16) は、ラテン語原典における相当箇所 (23) と語順、文章構造共に一致している。

(23) Sed *dicito mihi* quid mercedis dare velis ei

以上の比較より、OE訳 *Bede* は、ラテン語からの翻訳作品であるものの、逐語訳という形式は取られず、語順と文章構造の両方においてラテン語の影響をあまり受けていない表現が用いられ、先に引用した真鍋 (1983) の記述内容と合致するものとなった。このことは、OE翻訳者が、ラテン語の形式にとらわれずに、比較的自由に語順を選択できる環境にあったことを意味している。言い換えるならば、*Bede* の MC における一人称代名詞の VO, OV 語順の揺れは、ラテン語の影響をほとんど受けずに、書き手自身による語順の使用が反映されたものと考えられる。

今回調査の対象としているもう一つの散文作品である *ChronA* は、歴史的事実の記述に執筆の目的があり、真鍋 (1983) によると、きわめて簡朴な記述・記録であった。

その英語は、王位継承や戦いなどについての説明ではなく、きわめて簡朴な記述・記録である。単なる固有名詞の羅列も希ではない。[中略] このように、単一の節だけから成る年代が多く、また、複数の節を含む年代の記載も、and による節の結合が目立つ。したがって、この年代記の英語が、きわめて従節の少ない簡朴なものになっていることは当然の帰結である。

(真鍋：1983: 10-11)

このように *ChronA* に現れる英語は、*Bede* と比較すると、書き手の感情の表れは穏やかであったと考えられる。また、教育や指導という目的で書かれたものではなく、歴史的記録を書き留めておくことが主な目的であった。そのため、常に第三者的な記述で書かれているのが文体における大きな特徴である。こうした *ChronA* の成立背景から、使われる人称代名詞も必然的に三人称が多数を占め、今回の調査範囲に関する限り、一人称や二人称の代名詞は確認できなかった。

*Bede* の人称代名詞の調査で得られた一人称代名詞目的語と動詞の OV, VO 語順の揺れと作品の成立背景との関連について今回主張したことは、まだ問題点も多く、十分な確証を得るに

は至っていない。写本についての考察を含むいくつかの課題が残されていることも事実である。

## 5. おわりに

本稿では、アルフレッド王の時代に成立した二つの散文作品*Bede*と*ChronA*の代名詞目的語と動詞によって形成される語順について調査し、結果の分析を行った。その結果、OV、VO語順選択の揺れは、従属節ではまれである一方、文章構造の中心であり、著者の意図、感情を最も反映しやすい主節において顕著であった。また、ラテン語からの翻訳である*Bede*における語順のほうが地の文で書かれた*ChronA*よりも新しい語順傾向、すなわち歴史的に新しいVO語順が多く用いられるという調査結果は、文学的により洗練された作品がしばしば書かれた時代の言語よりも古い言語相を示すという通説とは矛盾するものとなった。こういった疑問を解明するために本稿ではさらに、同じ二つの散文作品における人称代名詞の人称と語順との関わりについて調査を行った。その結果、主節における一人称代名詞目的語ではOV、VO語順の揺れが、他の人称の場合と比べ、顕著に表れることが判明した。民衆の教育・指導を目的とする*Bede*は*ChronA*と比べ、書き手の意図や感情が文体に反映され易いと考えられる。その結果として、書き手との関係が深い一人称代名詞を含む主節にOV、VO語順の揺れが生じたという試論を提示するに至った。*ChronA*では、同様の結果を得るには至らず、分析の手法に課題が残った。*Bede*の調査に関してもいくつかの課題を残すこととなった。今回の調査で残された課題については、今後の研究課題としたい。さらに、他の散文作品の分析を通じて、この論考で提示した主張をより明確なものにしていきたい。

### 注

\* 本稿は日本中世英語英文学会第19回全国大会（2003年12月13日、東京外国語大学）における研究発表で口頭発表した内容の一部をもとに加筆、修正したものである。

- 1) There are, however, patterns which are to be accepted as OE variants of SV but which are not possible in MnE. Here we must note particularly first, the idiomatic position of adv. *ne* 'not' immediately before V, e.g. ... and second, the intervention of a pronoun object or of pronoun objects, direct and/or indirect, between S and V. This is regular, but not compulsory...(Mitchell 1985: § 3907)
- 2) It is also obvious that SV did not become predominant in the OE period. (Mitchell 1985: § 3950)
- 3) 9世紀後半の成立。ローマのイギリス侵攻から西暦731年までにいたる歴史と伝説が記されている。ラテン語文献からの古英語翻訳。アルフレッドが執筆に関わっていないというのが定説となっている。成立当初の原本となる写本は失われており、現存する5つの写本は、元の写本より書き写されたものである。
- 4) 7種類ある*Anglo-Saxon Chronicle*の写本の一つ。一般に*The Parker Chronicle*と呼ばれる。作成当初の原本となる写本は現存しないが、西暦891年にウェセックス (Wessex) 王アルフレッド (Alfred, 在位871-99) の命により編纂が始まったとされる。
- 5) 対格と与格との相違が語順に影響を与える可能性は否定できず、それぞれ独立した調査が必要だっ

- たかもしれないが、調査の時間的制約もあり、本稿では対格、与格をまとめて代名詞目的語とした。
- 6) 情報構造に基づくOE語順研究ではFirbus (1957), Heaviness理論によるではReskiewicz (1966), 言語類型論による語順研究ではVenneman (1974), テキスト言語学ではKohonen (1978), 動詞第2位言語に基づく分析ではVan Kemenade (1987), Koopman (1990), Pintzuk (1992) 等が著名である。一部は、久保内 (1982) にも述べられているので、参照にされたい。
  - 7) *and*は*ond*と綴られることもある。また、Jの記号で表記されることもある。本稿では、*and*と同様の統語的、意味論的機能を持つものと捉え、ひとまとめに扱っている。
  - 8) CCでは、*Bede*, *ChronA*の調査範囲ではともに*þa*で始まる節が確認できなかったため、表4では*þa*の項目を除外している。
  - 9) *Bede*のラテン語原典の引用は、King (1930) を参考にした。

#### 参考文献

##### Primary Sources

- Garmonsway, G. N. (Trans.). (1953). *The Anglo-Saxon Chronicle*. London: Dent.
- King, J. E. (Trans.). (1930). *Baedae Opera Historica*. (vol. 1). (The Loeb Classical Library). London: William Heinemann.
- Miller, T. (Ed.). (1890-1898). *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People* (vols. 1-4). London: EETS. (OS 95, 96, 110, 111)
- Plummer, Charles (Ed.). (1892-1899). *Two of the Saxon Chronicles Parallel: With Supplementary Extracts from the Others* (vols. 1-2). Oxford: Clarendon.

##### Secondary Sources

- Andrew, S. O. (1944). *Syntax and Style in Old English*. Cambridge: Cambridge University Press; (repr.) 1966. N.Y.: Russel & Russel.
- Bean, M. C. (1983). *The Development of Word Order Patterns in Old English*. London: Croom Helm.
- Denison, David. (1986). On word order in Old English. *Dutch Quarterly Review*, 16, 277-95.
- \_\_\_\_\_. (1993). *English Historical Syntax: Verbal Constructions*. London: Longman.
- Fischer, O. (1992). Syntax. In O. Fischer (Ed.), *Cambridge History of the English Language, 1066-1476* (pp.207-408). Cambridge, Cambridge University Press.
- Firbas, J. (1957). Some thoughts on the function of word-order in Old English and Modern English. *Sbornik praci filosoficke fakulty Brneske University, A.5*, 72-98.
- Fries, Charles C. (1940). On the development of structural use of word-order in Modern English. *Language*, 16, 199-208.
- Kemenade, A. van. (1987). *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*. Dordrecht, Holland: Foris.
- Kohonen, V. (1978). *On the Development of English Word Order in Religious Prose around 1000 to 1200 AD* (Publications of the Research Institute of the Åbo Akademi Foundation 38). Åbo: Åbo Akademi.
- Koopman, W. (1990). *Word Order in Old English with Special Reference to the Verb Phrase* (Amsterdam Studies in Generative Grammar 1). Amsterdam: University of Amsterdam.
- 久保内端郎. (1982). 「初期英語語順研究の課題」. 寺澤芳雄, 大泉昭夫 (編), 『英語史研究の方法』. (pp.119-52) 東京: 南雲堂.
- Lehmann, W. P. (1972). Contemporary linguistics and Indo-European studies. *Publications of the Modern Language Association of America*, 87, 976-93.
- 真鍋和瑞. (1983). 「中世の英語散文とその文体」. 東京: 開文社出版.
- Mitchell, Bruce. (1964). Syntax and word-order in "the Peterborough Chronicle" 1122-1154. *Neuphilologische Mitteilungen*, 65, 113-44.
- \_\_\_\_\_. (1985). *Old English Syntax: Vol. 2. Subordination, Independent Elements, and Element Order*. Oxford: Clarendon.



- Mitchell, Bruce, & Robinson, Fred C. (1992). *A Guide to Old English* (5th ed.). Oxford: Blackwell.
- 小野茂, 中尾俊夫. (1980). 『英語史 I』 (英語学大系 8) 東京: 大修館.
- Pintzuk, S. (1992). *Phrase structures in competition: Variation and change in Old English word order* (Doctoral Dissertation, University of Pennsylvania). Published (1999). New York: Garland Publishing.
- Quirk, Randolph, & Wrenn, C. L. (1957). *An Old English Grammar* (2nd ed.). London: Methuen.
- Raffel & Olsen. (1998). *Poems and Prose from the Old English*. New Haven and London: Yale University Press.
- Reszkiewicz, Alfred. (1966). *Ordering of Elements in Late Old English Prose in Terms of Their Size and Structural Complexity*. Warszawa: Ossolineum.
- Rybarkiewicz, Włodzimierz. (1977). The word order in Old English and the functional sentence perspective. *Studia Anglica Posnaniensia*, 9, 87-93.
- Shannon, Anne. (1964). *A Descriptive Syntax of the Parker Manuscript of the Anglo-Saxon Chronicle from 734-891*. The Hague: Mouton.
- Stockwell, R. P., & Minkova, D. (1991). Subordination and word order change in the history of English. In D. Kastovsky (Ed.), *Historical English Syntax*. (Topics in English Linguistics 2) (pp.367-408). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Vennemann, Theo. (1974). Topics, subjects and word order: From SXV to SVX via TVX. In J. M. Anderson, & C. Jones (Eds.), *Historical Linguistics. Proceedings of the First International Conference on Historical Linguistics, Edinburgh, 2-7 September 1973* (Vol.2) (pp.339-379). Amsterdam: North-Holland.
- \_\_\_\_\_. (1984). Verb-second, verb late, and the brace construction: Comments on some papers. In J. Fisiak (Ed.), *Historical Syntax* (pp.627-636).
- Visser, F. Th. (1963-73). *An Historical Syntax of the English Language* (vols.1-3). Leiden: E.J. Brill.
- Yamamura, Seiji. (2001). *Word-Order Patterns in Late Old English: A Study of Object-Verb/Verb-Object Variation*. Osaka: Kansai Gaidai University.

# Purposes of Writing Old English Prose Works and Their Effects on Word Order

— Through an Comparative Analysis of Word Order  
between a Verb and Its Pronominal Object —

Seiji YAMAMURA

## Abstract

In this paper, based on the analysis of the way how writers of Old English prose works used the word-order between a verb and its pronominal accusative or dative object, a proposal will be presented about the relationship between the condition where prose works were written and its effects on word-order. As the source of corpus I chose two prose works, *Bede's Ecclesiastical History of English People* (hereafter *Bede*) and *The Parker Manuscript of Anglo-Saxon Chronicle* (hereafter *ChronA*), in the hope of a good contrast of results between two works. Both works began to be written during the reign of King Alfred, but they are quite different from each other in the style and the purpose of writing. The word order of an accusative or a dative pronominal object and a verb will be investigated in the present study. The result of investigation was that the preference OV or VO order was the most unstable in the main clause of *Bede* where the first person pronominal objects were used, although OV order, which is thought to be older than VO order, was preferred in *Bede* as far as all types of object were investigated. In prose works such as *Bede*, which was aimed at educating and instructing common people, writers might attempt to use the OV order. But exaltation of feeling might frequently make them use variety of word orders, especially when they used first person pronouns which indicate writers or speakers themselves in many cases.

**Keywords:** Old English Prose, Word-Order, Pronominal objects, Stylistics, Syntax